



「未来を見据えて」

受賞者：菱谷 怜さん

重症肺炎……、人工呼吸器……、シリンジボンもたくさんだ。

私は新人看護師の頃、重症集中治療室で働いていた。看護学生の時には関わることがなかった重症な患者さんへの看護や、触れたこともない機械の扱い、そこに表示される数値の意味を学ぶのに必死だった。毎晩、勉強を続けた。

その当時の私は目の前の患者さんと向き合えていなかった。今日、看護するのは「重症肺炎の患者」、この間は「人工透析の患者」……。私はいつも患者さんではなく、疾患や機械と向き合っていた。自分が勤務している間は、とにかく何も起こらないようにと、疾患や機械の知識について頭を巡らしながら働いていた。

ある日、五十歳代の「重症肺炎の患者」を受け持っていた時、循環動態が悪くなり、先輩看護師と一緒に、どのように看護をするか話していた。すると、先輩看護師は、「この人はまだまだ社会で活躍しなきゃいけないから助けていな」と独り言のように言った。小さな声だったが、私の看護の未

熟さを気付かせるためには十分すぎるほど大きかった。この先輩は、目の前の患者の未来まで見据えて看護をしているのか、と。

私は、患者が抱える疾患や装着している機械ばかり考えていたが、本当に看護すべきなのは目の前の患者本人なのだ。そこから、患者さんについて話す時、「肺炎の患者さんが」ではなく「○○さん」と必ず名字で呼ぶように心がけた。当然のことではあるが、私はそれができていなかった。そして、患者さんの年齢や背景情報から、その人がこれから歩む未来を想像した。会社に勤めていれば、会社で活躍する姿、子どもがいれば、子どもと遊ぶ姿。

先輩看護師の何気ない二言で、看護師が患者さんの今だけではなく、未来を見据えて看護をしていることに気付かされた。誰かの命を守るためには、患者さんの人生に思いをはせることが必要なのだ。私は、今、患者さんの人生の一部に関われることにありがたみを感じている。